卒業論文

若者の性売買における貧困の脱構築

――消極ゾーンの若者たち――

2014 年度入学

九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2018 年 1 月　提出

目次

1　研究の背景 1
2　日本の性風俗変遷についての先行研究 4
3　現代における性売買の実態 11
4　法規制から見る性風俗の立ち位置 20
5　性風俗世界への「支援」の現状調査 23
6　当事者調査概要およびその結果 29
7　調査内容の考察 45
おわりに 50
[文献] 51

要約

これまで、性売買、主に性風俗は入り口論であふれかえっていた。悲惨な生い立ち、現状の貧困をセンセーショナルに取り上げるメディアばかりが目立っている。そのような見方が、性風俗に勤務する女性たちは「救済すべき対象」として見られてきた。

性風俗は絶対悪ではないし、そもそも善悪で測ることのできない産業である。問題なのは「風俗をやっていること」ではなくて、「風俗という仕事の特別性によって社会から孤立し困難を抱え続けること」である。

風俗から引き離すための支援ではなくて、ほかの見方から支援の方法を模索できないだろうか。いままでは性売買の要因は貧困であるということを前提に施策が作られていたことは否めない。貧困を理由に、ではなく性売買を行い続ける人に調査すれば、新しい支援の形が見出せるのではないだろうか。

この研究の意義は、貧困を理由にしていたら確実にみえてこない困難を見つけ出すことにある。とくにお金はいらないけど性売買という行為が好きでやってるわけではない層、すなわち、なんとなくはじめて、何らかの理由で続けている人の困難を分析する。

当事者への半構造化インタビュー結果として、若者は若者ゆえの性の価値に自身の価値を重ねることができ、それにあやかって自分自身の価値の確認行為をしていることが明らかになった。そして、継続する理由として、本人はその確認行為に対しての自覚を持っていなかった。

明らかにされた困難は。充たされたい欲の充たし方を知らないことである。性売買の傾向を図で明らかにし､フェーズごとの適切な SOS の出し方がわかりそれが各員に用意されるようになる社会への貢献を目指す。